野生動物と動物園動物をつなぐ研究、と保全活動～ユキヒョウを例に～

木下こづえ
（京都大学野生動物研究センター）

世界で最も高いところに生息するネコ科動物、ユキヒョウ。中央アジアの高山生態系の最高次捕食者として生態系維持の重要な役割を担っています。しかし、人が足を踏み入れるのも困難な高山に生息しているため、「ゴースト・アニマル」ともいわれ、直接その姿を見た者は少ないのが現状です。

ユキヒョウは高山の厳しい環境の中で単独で暮らしており、広大な行動圏をもっています。そのような環境下で、どうやって雄と雌は出会っているのだろう？そんな疑問を抱きながら、私の研究生活は、動物園個体を日々詳細に観察し、糞を分析して彼らの生理状態（ストレスや発情など）を調べることからはじまりました。糞は、直接観察が困難な野生ユキヒョウでも、採取することが可能です。動物園での詳細な観察・糞分析の研究成果を生かして、糞から野生ユキヒョウの生理状態を分析する研究に着手しました。

ユキヒョウは中央アジアの 12 か国にまたがって生息しており、そこに暮らす人々は多様な文化をもっています。ユキヒョウは絶滅に瀕する種とされていますが、家畜を襲撃することで報復殺の対象となり、多くの個体が人の手によって命を落としています。生息地での研究を進める中で、現地の人々に協力できる活動はないか？研究活動を通して、保全活動にも目を向けるようになりました。本シンポジウムでは、動物園と野生をつなぐ研究活動に加えて、生息地での保全活動についても紹介したいと考えています。